

シノブ考 (一)

我妻 多賀子

一 はじめに

シノブという動詞は、現代語では左のように用いられる。まず、人目を避けてこっそりとおこなったり、隠れたりするときに、

① 世をシノブ姿、 建物の陰にシノブ

などと使う。また、こらえたり、我慢したりするときには

② 恥をシノブ、 不自由をシノブ

という。その他、離れている人や過ぎ去ったことを懐かしく思い慕うときの

③ 故人をシノブ、 昔をシノブ

という用法もある。これらのうち、①と③は日押の会話文でも使われるが、②はどちらかというと文章語的な性格が濃い。また、漢字を当てると、①・②は「忍ぶ」、③は「偲ぶ」となり、いずれも他動詞の五段活用である。(注1)ところで、このシノブについては、先行論文がいくつか出ている。(注2)

それによると、上代では「忍ぶ」がバ行上二段活用、「偲ぶ」は第三音節が清音の「偲ぶ」という八行四段活用であったという。よって、両語は截然と区別されていた。ところが、時代が下るとそれぞれが音変化を起し、「じつとこらえる」意の「忍ぶ」と、「思い慕う」意の「偲ぶ」が意味的に似通っているところから、両者が混同し、活用も混乱して来たという。つまり、この語が現代のような用法に定着するまでには、複雑な過程を経て来たことになる。

そこで、その変化の様子を実際の作品の例に当たって、通時的にながめてみることにしたい。以下代から時代順に考察を加えて行くことにする。

二上代

『万葉集』には第三音節が濁音の、シノブという一字一音書きの例が左の一例だけ見える。

○万代と心は解けてわが背子が拵みし手見つつ忍び(吉野備)かねつも

△一七・三九四〇V

この歌は「いづいづまでと打ち解け合つて、あなたがつまんでくれた手を見て、(私は思いに)こらえきれませんが

した」と訳せ、シノフは現代でも使う「こらえる、我慢する」の義を表す。また、その用字を見ると、ノもじも乙類の漢字が使われているので、シノビは *sinobi* という、八行上二段活用になる。

一方、第三音節が清音のシノフには、左のような例がある。

○朝霞鹿火屋が下の鳴く蛙しのひ（シノフ比） つつありと告げむ児もがも

△一六・三八一八▽

この歌の「朝霞」は枕詞、「鹿火屋」は古来難解の語だが、普通「蚊を追う火、または、鹿を追う火をたく屋」と言われる。よって一首は「鹿火屋の下でこっそりと鳴いている蛙のように『あなたをしのび暮っています』と告げるような子がいればいいのになあ」と解釈出来、シノフは現代でも耳にする「思い慕う」の義になる。そしてその用字はノ・ヒ共に甲類の漢字で書かれているので、*sinofi* となり、八行四段活用の動詞である。したがって、先の「我慢する」意のシノフとは、第三音節ばかりでなく、第二音節も相違していたことになる。『万葉集』ではこの「思い慕う」意のシノフがととも多く、合計二十五例を数える。中でもこの歌のように、故人や遙か遠くにいる人など、人間を対象としたものが三十一例と多い。

○山越しの風を時じみ寝る夜落ちず家なる妹をかけて偲ひつ（小竹積）

△一・六▽

○瓜食めば 子ども 思ほゆ 粟食めば まして 偲ほゆ（斯農波由） （注3）

△五・八〇二▽

○秋風の寒きこの頃下に着む妹が形見とかつも偲は（思發播） む

△八・一六二六▽

○山吹の花取り持ちてつれもなく離れにし妹を偲ひ（シノフ比） つるかも

△一九・四一八四▽

○足柄の八軍山越えていましなば誰をか君と見つつ偲は（志發波） む

△二〇・四四四〇▽

右に挙げた五首は順に「家にいる妻を心に浮かべて思い慕っている」「粟を食へればいっそう子どもがいとしくなる」「また一方では妹の形見としてあなたを思つてよすがとしましょう」「離れて行ったあなたをお慕いしました」「誰をあなたと見てお慕いしましょう」と部分的に訳すことが出来る。よって、シノフはいずれも人間を対象とした「思い慕う」意になる。なお、人間以外では、鳥のホトトギスについていうものが二例、また、場所を対象とするものが同じく二例ある。

○わが幾許慕はなほ(斯努波) く知らに霍公鳥何方ほととぎすの山を鳴きか越ゆらむ

△一九・四一九五▽

○生死しんじの二つの海を厭いとはしみ潮干しほの山をしのひひ(之努比) つるかも

△一六・三八四九▽

以上、『万葉集』には、右のような「思い慕う」の意を表すシノフが三十五例用いられている。その他、集中には次のようなシノフがある。

○佐保川に鳴くなる千鳥ちとせ何しかも川原がはらを徳とくひひ(思努比) いや川のぼる

△七・二二五二▽

これは佐保川の千鳥に呼びかけた歌で、通釈すると「佐保川で鳴いている千鳥よ。どうしてそんなに川原の景色を賞美してどんどん川をのぼるのだ」となる。よって、このシノフは用字はsinofiで同じでも、「思い慕う」ではなく、何かを見てその美しさに感動したときに発する「賞美する」の意を表している。ここでは佐保川の川原の景色を対象としているが、このように眼前の景色、特に山・海・川をほめたたえてシノフとするものが他に七例ある。

○真木の葉のしなふ勢せうの山やま賞あやはは(之努波) すてわが越えぬるは木の葉知りけむ

△三・二九一▽

○布勢の海の沖つ白波あり通ひまいや毎年としとしに見つしつ賞美は（俣能波）む（注4） 〆一七・三九九〆

○・・・秋の葉の黄色もみだふ時に あり通ひ 見しつつ賞美は（思努波）め この布勢の海を 〆一九・四一八七〆

その他、景色以外の「賞美する」の対象には、梅・黄葉などの植物が四例、また千鳥・ホトトギスなどの鳥類が五例ある。

○・・・秋山の木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ（思努布） 〆一・一六〆

○あしひぎの山下日陰かげ纏まとける上にやさらに梅を賞めは（之努波）む 〆一九・四二七八〆

○古いにしへよしのひ（之怒比）にければ（雷公鳥鳴く声聞きて恋しきものを） 〆一八・四二一九〆

○夜ぐたちて鳴く川千鳥うべしこそ昔の人もしのひ（之努比）来にけれ 〆一九・四二四七〆

右のように、「賞美する」意のシノフは集中に十七例使われているが、これは現代語にはない用法である。以上、『万葉集』には、シノフ（忍）がたった一例しかなかったのに、シノフ（愔）は「思おもい慕もう」三十五例、「賞美する」十七例と、合わせて五十二例も使われていたことになる。（注5）

次に『万葉集』以外の上代文献におけるシノフ（忍）およびシノフ（愔）の確かな例を列挙してみることにはしたい。

○・・・鏡かがみなす 吾われが思おもふ妻 有りと 言ことはばこそよ 家にも行かめ 国をも愔（斯怒波）め

△記歌論・九〇▽

○丈夫の 踏み置ける足跡は 石の上に 今も残り 見つつ偲へ(志乃願)と 長く偲へ(志乃願)と

△仏足石歌・七▽

○汝の 志 をば、しまらくの間も忘れ得まじみなも、悲しび賜ひ偲ひ(之乃比) 賜ひ、大御泣契かしつつ

おほまします

△続日本紀宣命・五八▽

今回の調査で探し得たのは右の四例だが、これらは「国」「仏」などを対象とし、いずれも「思い慕う」の意で使われている。その他にシノヒコトという言葉がある。

○藤原大臣に賜てある 諫(志乃比古止)の書にのりたまひてあらく

△続日本紀宣命・四〇▽

右のシノヒコトは「人が死んだ時、生前のことを偲んで死者の霊に捧げることば」を意味する。よって、シノヒコトのシノヒが「偲ひ」の意であることは明らかで、熟語化したものが見られるほど、「思い慕う」意のシノフが普及していたと言えそうだ。続いて中古の用法を見ることにしたい。

三 中古

この時代のシノフ(忍)およびシノフ(偲)の使い方を見て行くに際し、まず前代の用法をまとめておくことにする。

A シノフ (忍フ)

八行上段

① 我慢する・こらえる

一

B シノフ (僂フ)

八行四段

① 思い慕う・懐かしく思う

三九

② 賞美する・ほめたたえる

一七

一番下に記した数字は用例数である。上代では、三種のシノフ(フ)が用いられていたが、その使用量にはかなりの開きがあったことに着目し、これが今後どのように変わって行くのかを調べてみることにしよう。

さて、中古に入るとまず、上代特殊仮名遣いが崩壊する。したがって、上代に見られた *sinobi* (忍ビ) は *sinobi* となり、甲乙の区別がなくなつて、特に第二音節は *sinofi* (僂ビ) と同じになる。また、第三音節に関しては、上代のように万葉仮名表記の資料があれば清濁がわかるが、中古に入ると傍証となる資料がなかなかない。結局、時代は少し下るが、清濁決定の資料である『類聚名義抄』に頼ることになる。そこで、『名義抄』の観智院本をはじめとする諸本を見ると、シノフ(忍)だけが項目として掲げられ、シノフ(僂)は出て来ない。シノフ(忍)は、左記の観智院本の例のように、第三音節に声点が二つ付いているので、フが濁音であったことは明らかである。

忍・シノフ

ツムム

コハシ

オソフ

禾ニ

△法中八一▽

ただ、右のように、シノフ(忍)は上代から引き続いて第三音節が濁音であることが明らかたとしても、果たして、シノフ(僂)の第三音節が、中古では現代のように濁音化していたものかどうか判断のしようがない。

さらに加えて、活用の問題がある。上代でははっきりとシノフ(忍)が上二、シノフ(僂)は四段と活用に相違があった。ところが、中古に入ると、シノフ(忍)に打ち消しの助動詞スや推量の助動詞ム、そして、打ち消しの接続助

詞デを伴ったシノバズ、シノバム、シノバデという形が現れる。これは明らかに、シノフ(忍)が四段活用でも用いられていたことを意味する。とすると、シノフ(忍)は、すでに中古で、現代のように四(五)段化してしまったのであるうか。

もう一つ、意味的に冒頭で述べた「人目を避けてこっそりとおこなったり、隠れたりする」義のシノフ(忍)が、上代では出て来なかったが、この種のもは中古で使われ始め、現代まで続くのであろうか。そんないくつかの疑問点を説明するために、以下、意味別・時代順に、実例に当たって見て行くことにしよう。なお、その際認定しにくいのが活用である。というのは、いうまでもないことだが、バ行の四段と上二は左のように、最も使用度数が多い連用形と、言い切りの形の終止形が同形になる。

	未然	連用	終止	連体	已然	命令
四段	バ	ビ	フ	フ	ベ	ベ
上二	ビ	ビ	フ	フル	フレ	ビヨ

要するに、シノビおよびシノフという形は四段にも上二段にもとれることになるが、現代語の用法などから考慮して、ひとまず今後これらは四段ととることにする。よって、上二のシノフは未然形のシノビ、連体形のシノフル、已然形のシノフレ、命令形のシノビヨの四つのみを確かな例として取り挙げることにしたい。

以上、活用に関してはとりあえず右のような考え方を前提とし、意味グループ別に考察を加えて行くことにする。ただ、一言で意味といっても、シノフの場合、清濁や活用が絡まって非常に複雑なので、上代で述べた順とは異なるが、はじめに簡単なものから述べて行く。

まず、前代にすばらしい景色だとか、美しい植物・鳥類などをほめたたえて「賞美する」の意で用いられていたシノフ(憊)は、中古以降ほとんど使われず、歌に少し見えるだけになる。(注6)

○恋しくは見てもしのばん紅葉はを吹きなちらしそ山おろしのかぜ

△古今・五・二八五▽

○・・・山ほどときす なくことに たれもねざめて からにしき たつたの山の もみぢばを 見てのみしのぶ

神無月 しぐれしぐれて・・・

△古今・一九・一〇〇二▽

○いづれをかわきてしのばん秋の野にうつろはんとて色かはる草

△後撰・七・三七二▽

○めづらしきけふのかすがのやをとめを神もうれしとしのばざらめや

△拾遺・一〇・六二〇▽

右のうち、『古今集』の二例は共に「紅葉」、『後撰集』の例は錦のように見える千々の「草葉」を対象としている。このように、植物に感心し「賞美する」と使ったシノフ(偲)は、すでに上代で見た用法と同じである。残る『拾遺集』の例は、宇多法皇の御幸のために神楽を舞う少女の様子を見て、藤原忠房が詠んだもので、一首は「珍しい今日の春日の八少女の舞い姿を見て、神も嬉しいと賞美なさらないことがあるうか。イヤそんなことはないだろう」の訳になる。これは神が少女の舞い姿に感心してシノフ(偲)と使った珍しい例で、この種のもものは上代には見られなかった。しかし、このシノフ(偲)は「賞美する」の意にとるのが一番ふさわしいように思われる。

以上、上代で盛んに使われていた「賞美する」意のシノフ(偲)は、中古に入ると右のように歌に数例出て来るのみとなる。そして、この意味が現代でも使われていないことから考えると、あるいはこれは、上代特有の用法であったと見ていいのかもしれない。

次にシノフ(偲)では、もう一つ上代に「思い慕う」意のものがあつた。これは中古でもよく使われ、特に故人や遠くに離れている人など、人間を対象に言う場合が多い。

○ つれもなき人をやねたく白露のおくとはなげきぬとはしのばん

△古今・一一・四八六▽

○ ……世をう月にも なりしかば 山ほととぎす たちかはり 君をしのぶの 声絶えず

△蜻蛉・安和二年六月▽

○ かきたれてのどけき頃の春雨にふるさと人「源氏」をいかにしのぶや

△源氏・真木柱▽

○ 人をもかへりみさせ給つれば「頼通八人ニモヨク目ヲカケテヤラレタカラ」、しのび申す人の多かるも理なり。

△栄花・三九▽

○ 人知れず掎て給し七日々々の果て「七百目ゴトノ女君へノ供養ノ終リノ四十九日」にも、あはれしのびたれど・

△狭衣・三▽

○ 浅茅原あれたるやどはむかし見し人をしのぶのわたりなりけり

△後拾遺・一五・八九三▽

○ 淨蔵文ヲ取テ披テ見ルニ、此ノ我ガシノフ人ノ手ニテ有り。

△今昔・三〇ノ三▽

中には、人間でも自分自身のことを指す場合もある。

○ たもどともしのばさるまし「私ノ袂トモ思ツテ私ノコトヲシノンデクダサラナカッタデシヨウノニ」秋風になび

く尾花のおどろかさずは

△大和・一七▽

○しのぶらんものとも知らで「私ヲ慕ッテノ涙雨トモ知ラナイデ」おのがただ身を知る雨とおもひけるかな

△和泉式部日記▽

○はらからあまた持たる人こそ羨ましけれ。「私ヲ」個ぶべき人だに無きに。

△狭衣・一▽

○いとひても猶しのばるるわが身かなふたび来べき此世ならねば

△千載・一七・一二九▽

○しのばれんわが身と思はばいかばかり君をあはれと思ひおかまし

△とりかへばや・中▽

その他「思い慕う」意のシノブ（個）が対象とするものは、左の例の（ ）（内に記したように、多種多様である。

○故郷は花こそいとしのばるれちりぬる後はとふ人もなし（植物）

△千載・二・一〇二▽

○恋しさはその人かすにあらずとも都をしのぶ内にいれなむ（場所）

△金葉・六・三四七▽

○もろともに秋をやししのぶ霜枯れの萩の上葉を照らす月影（季節）

△千載・一七・一〇一六▽

○古のなれにし雲をしスナハのぶとや霞をわけて君尋ねけん（自然現象・場所）

△栄花・四〇▽

○いにしへの千々八千種の物思ひを今も悲しといかが個ちひばむ（抽象的事項）

△宇津保・樓上上▽

なお、用法的にはこの「思い慕う」意のシノフ(偲)は、故人と関連の深い「形見」、そして過ぎ去った時を言う「昔」と併用されたものが目立つ。

○ 教へ置かたみを深くしのばなむ身は青海の波に流れぬ

△今鏡・五▽

○ いたづらに過ぐる月日をかぞふればむかしをしのぶねこそなかるれ

△金葉・九・五九八▽

○ 年を経て昔をしのぶ心のみ憂きに付けてもふか草のさと

△千載・九・六〇一▽

さらに、シノフ(偲)を占びた軒端や門などに生える植物のシノフグサ(忍草)や地名のシノフ(信夫)と掛詞にして用いた例もある。

○ ひとりのみながめふるやのつまなれば人をしのぶの草ぞ生ひける

△古今・一五・七六九▽

○ 君をのみしのぶの里へゆく物を会津の山のはるけきやなぞ

△後撰・一九・一三三二▽

右に述べたことから、「思い慕う」意のシノフ(偲)は、中古ではかなり用途が広く盛んに使われていたことがわかる。そして、このシノフ(偲)は、未然形がシノハの形で出て来るので、上代と変わらず明らかに四段活用である。ただし、第三首節に関しては資料不足で清濁を決定づけることは出来ない。

と云うので、ここに一つ注目すべき例がある。それは「思い慕う」の意を示しながら、四段活用ではなく確かに上二段活用とされるシノフ(偲)が出て来ることである。『源氏物語』の例から見てもよ。

○あひ見ずてしのぶる頃の涙をもなべての秋の時雨とや見る

△源氏・賢木△

○なき人をしのぶる宵の村雨に濡れてや来つる山ほととぎす

△源氏・幻△

はじめの例は、光源氏が朧月夜に向かつて詠んだ歌で「あなたに違わないので、思い慕って泣いている今日この頃の涙をも、あなたはありふれた普通の秋の時雨だと見ますか」と通釈出来る。よって、シノフ(愔)は「思い慕う」意を表しているが、使われているのは上二の連体形シノフルである。次の例は、亡くなった紫土を追慕して、光源氏が山ほととぎすに呼びかけた歌で、全釈すると「亡き人を思い慕って、今宵私が泣いている涙のような村雨に濡れて来たのであったか、山ほととぎすは」となる。つまり、この歌でもシノフ(愔)は、上二の連体形シノフルで、「思い慕う」意を表している。その他、同種のものが『源氏物語』以外にもある。

○いにしへの近きまもりをこふるまにこれししのぶるしるしなりけり

△後拾遺・一九・一一〇四△

○「思ひわづらひしのぶる人に」など時々はいひすめて・・・

△とりかへばや・上△

○偲ぶる方の御くるしさも、また心うつれる一方に隠れたまひて・・・

△とりかへばや・中△

結局、右のような例が出て来たのは、元々が上二段のシノフ(愔)との混同の結果生じたものであろう。とすると、シノフ(愔)は、混同が起きるくらいだから、すでに中古に入ると第三音節が濁音化していたと考えられなくもない。以上、中古におけるシノフ(愔)の考察を終え、続いて上代に出て来たもう一つの「我慢する」の義を示すシノフ(忍)について見て行くことにしよう。上代で一例しかなかったこの意のシノフ(忍)は、中古になると相当数使われるようになる。ただ、その用法はいくらか固定化していて似たものが多い。最も多いのは、助動詞ズや接続助詞デを伴って未然形として使われ、打消の意味を表すものである。その際、未然形はシノバの形で出て来るので、その活用は

上代のような上二段ではなく、四段になる。そして打消の中でも、上に陳述の副詞エが来て、「我慢出来ない」という可能の意を含んだものが目立つ。

○又、こと局に人あまた見ゆるをえ忍ばで言ひやる。

△平中・七▽

○をちかへりえぞ忍ばれぬ郭公ほの語らひし宿の垣根に

△源氏・花散里▽

○なほ、昔より絶えず見ゆる「柏木ノ女三宮へノ」心はへ、え忍ばぬ折々ありきかし。

△源氏・柏木▽

○色見えぬ心ばかりはしづむれど涙はえこそしのばざりけれ

△金葉・八・四四三▽

○うち思しくらぶるに、えしのばれ給はず。

△夜の寢覺・四▽

『源氏物語』は特に右のように、副詞エが上に来るものが多く、「我慢する」意のシノブ(忍)三〇例のうち、半数近い一四例までがこの形で用いられている。また、連用形シノビでは、下に係助詞モと下一段の動詞アフ(敢)を伴って「我慢しきれない」の意を表すものが多い。

○いみじうすこしがたうて忍びもあへず「中納言に告げさせ給へ」とぞ息の下にいはれぬる。

△浜松・五▽

○聞き給ひて、いかにしのびもあへず思しよろこばん。

△夜の寢覺・一▽

○一つ心なる人に向ひたる心地して目とどまる所に忍びもあへて……

△狭衣・一▽

その他、下に逆接の条件を伴うものや、命令形で呼びかけるもの、そして、上に副詞のヨク(能く)が来て、それと呼応するシノフ(忍)が複数の作品に用いられている。

○思う給へ忍びつれじ、さてもえあるまじければなむ。

△落窪・一▽

○いみじく忍はんと思ひたれど、え堪へ給はず、涙ながし給御けしきを...

△浜松・五▽

○なほしのべ花たちはなの枝やなきあふひすぎぬる四月なれども

△蜻蛉・天延二年四月▽

○松山の松の浦風吹きよせば拾ひてしのべ恋わすれ貝

△後拾遺・八・四八六▽

○我レハ是レ能く忍ぶ人也ト答フ。

△三宝松詞・上▽

○御涙こぼれさせ給へば、よく忍ばせ給へど、御心騒せさせ給へ。

△采花・一▽

以上、中古における「我慢する」意のシノフ(忍)は、類型化した用法の多いことが特徴である。なお、ここまで述べて来た諸例は、すべて四段活用のものだが、中古になっても上代と変わらず上二段で使われている例がいくつもある。

○心地にはかぎりなくねたく心憂しと思ふをしのぶるになむありける。

△大和・一四九▽

○あさぢふの小野の篠原しのぶれとあまりてなどか人の恋しき

△後撰・九・五七七▽

○みる人の名残りありげもみえぬよを何と忍ぶる涙なるらん

△宇津保・俊隆▽

○事ヲ忍ブルハ人ニ敬マハル。

△三宝絵詞・上▽

○御涙こぼれさせ給へど、いまいましてれば忍びさせ給へし。

△栄花・九▽

○かはりたまふけしき見えじと、さらぬ顔にしのおれど、出でたまひぬれば……

△とりかへばや・中▽

つまり、右の例から中古における「我慢する」意のシノブ(忍)は、その活用が四段、上二段のどちらとも定まらず、揺れていたことがわかる。

さて、最後にもう一つ、中古に入るとシノブ(忍)には「我慢する」意味以外のものが出て来る。それは「一、はじめに」のところで記した、人目を避けてこっそりとおこなったり、隠れたりするときの「秘密にする」意を表すもので、実は中古のシノブ(忍)はほとんどがこの意味で用いられている。先に『源氏物語』では、「我慢する」意の四段活用シノブ(忍)が、三〇例あると述べたが、これに上二段活用も加えると、計三十五例となる。ところが、「秘密にする」意のシノブ(忍)はその六倍以上となる二百十七例も使われている。そして、『源氏物語』ばかりでなく、大半の中古の作品で、シノブ(忍)は「秘密にする」意の方が「我慢する」意の五倍から十倍の使用量を示す。ただ、漢文訓読体の『三才絵詞』では、「我慢する」意の方がいくらか多いが、同じ漢文訓読体でも『今昔物語集』を見ると、「我慢する」十二例に対し、「秘密にする」はそのちょうど六倍になる七十二例も用いられていて、他の和文体の作品と変わらぬ。要するに、ジャンルに関係なく中古では、「秘密にする」意のシノブ(忍)が非常によく使われていたことがわかる。ところで、その実例を見ると、「秘密にする」意のシノブ(忍)は「我慢する」意のものに比べて数の上でも勝るが、用法も多種多様で「我慢する」のように類型化していない。あえて大きな特徴を挙げれば、一つは通フ、入ル、出ツ、詣ツ、参ル、行ク、渡ルなど、人の行動に関していう動詞を伴う例が多いことで、その中でも、通フが群を抜い

ている。

○しのぶ山しのびて通ふ道も哉人の心のおくも見るべく

△伊勢・一五▽

○おなじ女内裏の曹司にすみける時、忍びてかよひ給ふ人ありけり。

△大和・八三▽

○ただこそ、こおとどの御座に、あこ君とてかしつき給しに、しのびてかよふ。

△宇津保・忠こそ▽

○みこせ給ひてのち、しのびつつ通ひ給ひしかど、年月経れば・・・

△源氏・紅梅▽

○かすかなる山里にかくしおきてたまさかに忍びつつぞかよはまし。

△浜松・三▽

○しのびつつ行きかよへとや朝夕に馴れにし君があたりともなく

△とりかへばや・下▽

さらに、語ル、申ス、言フ、笑フ、泣クなど人間の言動活動や喜怒哀楽に関する動詞を伴う例が多いのも特徴の一つで、この場合は、泣クが一番多い。

○栄好方尊十今日ノ飯ヲウケ置テカクシ忍テナクコエアリ。

△三宝・中▽

○ある人々も忍びてうち泣くさまなどなん著く見え侍る。

△源氏・夕顔▽

○さるべきおとななどはしのびて泣きまじふ。

△紫式部日記▽

○恥づかしう物のつつましままに、忍びてうち泣かれつつ、暁には夜深くおりて・・・
△更級日記▽

○房ノキノ方ニ、誦シ始ムルヨリ読ミ畢ルマデ忍ビテ泣ク人ノ気色聞コユ。
△今昔・一二ノ三六▽

その他、動詞隠ル(ス)との併用例や、副詞のウチウチやカスカニが形容語として上に来たり、動詞アラハルと対義語風に使われたりする例などは、いかにも「秘密にする」意のシノブ(忍)の特徴を現している。

○暫ク隠レ居テ、忍ビタラム所ニ有ラムト思フ也。
△今昔・一一ノ一一▽

○在中將しのびてゐてかくしたてまつりたりけるを・・・
△大鏡・清和▽

○「光源氏ガ」つれなくてうちうち忍び給ふかたがた多かめるを・・・
△源氏・紅葉賀▽

○「コノ旅ハ」いと、かすかに忍びたり。
△源氏・玉鬘▽

○されど、忍びてもあらははれてもおのづから「出で給ひにけるをえしらす」とも・・・
△枕・一七九▽

○廿岸の松のうまねとしのびしはまねなよつひにあらはれにけり
△拾遺・一二・七四三▽

いずれにしても「秘密にする」意のシノブ(忍)は、ともかくその用例数がどの作品でもかなり多く、用法は千差万別

である。しかも、「我儘する」意のシノフ(忍)の時と同じく、上二段用例の例もわずかながらある。

○帰きは忍ぶれど、こかしてに響まつつとむれば・・・
△蜻蛉・安和元年九月▽

○今さらに思ひいでしどしどふるを忍びしきにこそ忘れわびぬれ
△大和・一七一▽

○忍ひずとも、さて知らぬ人によは、かく聞えうけ給はるも疎からねはこそ・・・
△宇津保・國議中▽

○世中にしのぶる恋のわびしきはあひてののちのあはぬなりけり
△後撰・九・五六四▽

○涙をも忍ぶるころの我が袖にあやなく月の宿りぬるかな
△千載・一三・八二四▽

○宮の宰相はしのぶる道の逢ふ事かたき忍ひ思ひに嘆きしつみつも・・・
△とりかへばや・上▽

これらの例から「秘密にする」意のシノフ(忍)も、「我儘する」意と同様、活用は四段か上二段か定まっていたなかつたことになる。なおこのように、中古で生じた「秘密にする」意のシノフ(忍)が急増しているのは、その行動が他人に知られないように、こっそりと秘密のうちになされていた当時の貴族社会の生活の一端を反映するものといえよう。

以上、中古のシノフ(忍・慥)について述べて来たことを、上代の時と同じようにまとめると、左のようになる。

A シノフ (忍) 四段または上段 ① 我儘する・こらえる

② 秘密にする・隠す

B シノフ (僞)

四段または上二段

① 思い慕う・なつかしく思う

② 賞美する・ほめたたえる

右のうちB②は、中古に入ると歌に少し出て来るだけで、用例は皆無に近かった。残る三つのうち、圧倒的に多く使われているのはA②で、かなりの開きがあつて、A①とB①がほぼ同数でこれに続く。ただ、このA①、A②、B①の三つは意味的に非常に接近している。A②は元々A①から派生したもので、じつところえることは、人目につかないように秘め隠すことにつながる。

○わが恋をしのひかねてはあしひきの山橘のいろに出でぬべし

△古今・一三・六六八▽

この歌は「私の恋を秘め隠しきれないで、きつと山橘の赤い実のように人に知られてしまつたらう」と訳せる。よつてシノフ(忍)は、「秘密にする」というA②の意にとれるが、ただ、そこには「じつと耐える」意のA①も含まれていると考えられなくもない。他の用例でも、A①とA②はどちらの意とも決めかねるものが意外に多い。また、中古で使われ出したシノビの複合語シノビアフ(忍敗)、シノビアマル(忍余)、シノビスグス(忍過)、シノビハツ(忍巢)などの動詞や形容詞シノビガタシ(忍難)、およびそこから派生した名詞シノビガタサ、形容動詞シノビガタゲナリなどのシノビには、「我慢する」と「秘密にする」の二つの意が含まれているように思われる。つまり、A①とA②は、当然のことながら、意味的にきわめて接近性が高い。

次に、AとB①の關係を見ることにならう。

○今はとて君が離れなはわがやどの花をばひとり見てやしのばむ

△古今・一五・八〇〇▽

これは「もしあなたが離れて行ってしまったら」と仮定して詠んだ歌で、下の句は「我が家の花をひとり見てあなたのことを懐かしく思うことになるのだろうか」と訳せる。よって、シノフはB①の「思い慕う」の意になる。ところが、歌の中に詠み込まれた「ひとり」という言葉から察すると、シノフといつても、ただの「思い慕う」ではなく、誰にも知られずにこっそりと耐えしのんでの行為であるように思われる。つまりこのシノフは、表向きはB①とはいえず、A①やA②の意味も含まれていると考えられないだろうか。もともと「思い慕う」という行為は、大っぴらに堂々と他人に知らせるものではなく、一人でじっと耐えながら、心中ひそかに行うものである。要するに、A①と②、そしてB①には、意味の上で類似点が認められる。したがって、上代ではシノフ(忍)とシノフ(憊)は明白に分かれていたが、中古に入って上代特殊仮名遣が崩壊したことから、まず両者の音韻上の区別がなくなり、それが意味にも波及して混同するようになったのであろう。『古今和歌集』ですでに紛らわしい例があることから、恐らく中古の初めには混同が起きていたと思われる。そして、シノフ(憊)がシノフ(忍)に吸収されたような形になったため、『名義抄』などにはシノフ(忍)のみが掲げられているのかもしれない。その辺の微妙な相違点についてはもっと詳しく調べる必要があると思うが、とりあえずかなり紙数も費やしたので、大方のご叱正を期待して、今号はこれで筆を擱くことにする。以下、中世や近世の用法と合わせて次号で考察を続行することにした。

注1 但し、打消に続く時は「聞クニシノビナイ」「捨テルニシノビナイ」とシノビの形も用いる。

注2 ○柿本人麿訓詁新見・四 『国語と国文学』二十六卷一〇号 大野晋 昭和二十四年一〇月

○古代国語の音韻に就いて 『国語音韻の研究』 橋本進吉 岩波書店 昭和二十五年八月

○上代語の訓詁と上代特殊仮名遣 『万葉集大成』第三卷 訓詁篇上 大野晋 平凡社 昭和二十九年八月

○『平安時代文学語彙の研究』 原田芳起 風間書房 昭和三十七年九月

○『平安女流文学のことば』 木之下正雄 至文堂 昭和四十三年十一月 其他

注3 この歌ではシノフのノに、万葉仮名のヌ(農)が当てられている。シノフがシヌフとも言い得る語であったことについては、日本古典文学大系(旧版)『万葉集』一、二の「校注の覚え書き」など参照。

注4 この歌の場合、シノフのノが乙類のノ(能)で書かれている。甲類のノと乙類のノは様々な原因で混同しやすかったため、他にも乙類の「能」や「乃」で書かれたシノフが何例もある。詳しくは日本古典文学大系(旧版)『万葉集』二の「校注の覚え書き」など参照。

注5 もう一首「うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み偲ひ(思慕妣) づるかも」△三・四六五Vでは、第三音節に濁音じの甲類「妣」が用いられていて例外となる。ただし、この部分京大本には清音の「比」が使われているので、それに従えば例外にならず、シノフ(偲)の例は計五十三例となる。

注6 中古のシノフ(偲)に関しては、第三音節の清濁がはっきりしないが、以後用例表記に際しては、便宜上シノフと濁音で記すことにする。なお、上代および中古の用例は、公刊の家計類をもとに、主として岩波書店発行の日本古典文学大系本(旧版)を用いた。